

# さらに国民の期待に応える研究所をめざす

所長



谷口 稔明

TANIGUCHI, Toshiaki

厳しい財政事情の基で一層の効率化が求められ、さらに大きな変化を迎えることが予想される中で、このたび4月1日付けにて動物衛生研究所長を拝命し、心引き締まる思いがします。しかし一方では、この時期での変化は、この先の動物衛生研究所の将来にも大きく係わることとなりますので、将来の展望を見据えて、国民の皆様の期待にお応えできる動物衛生研究所となり、より発展するように尽力したいと思っております。

動物衛生研究所は、動物の疾病の防除と衛生問題の改善を通じ、健康な家畜と安全な畜産物の生産に貢献し、家畜生産性の向上と消費者の安心を確保することを目的としています。また、わが国の畜産業さらには国際的な立場から、試験研究活動を展開するとともに、動物用生物学的製剤の製造と配布、病性鑑定と研修・講習、緊急問題への対応等を果たしてきております。とりわけ、牛海綿状脳症(BSE)や高病原性鳥インフルエンザ等の人獣共通感染症の発生は、食の安全・安心とも直接関わる問題ですので、今後も動物衛生研究所の使命や果たす役割は極めて大きいと同時に、国民の期待に対する責任も重大と思っております。一方、国内の動物医薬品業界では、研究開発資源が増大するとともに、国際競争も激化しており、国を挙げて、国内の開発力を高める必要があります。

そのような中で、「動物を守る、人を守る」ことをモットーにした動物衛生研究所の使命と役割を果たすべく、動物衛生分野の基礎から応用に到る研究を先駆的に進めることは言うまでもありませんが、具体的にはどのような疾病をどのような目標の下で撲滅していくのかといった戦略目標も考えつつ、必要に応じて、行政機関への技術的な提言を行いながら、動物衛生に関する研究開発を推進する必要があります。そのためには、常に社会ニーズ、研究ニーズを的確に把握し、先を見通した

研究を展開するとともに、研究成果等を挙げ、社会に還元する姿勢を保ちつつ、不断の努力により、研究開発における競争力をつけることが今まで以上に求められるものと思います。さらに、今後もますます、民間企業や大学等を含めた産学官連携の強化により、基礎的研究や得られた成果の実用化技術の開発に努める必要があると考えております。

現在、職員数が限られた中では、一人一人の職員の存在価値がますます高くなると思っております。特に、若い研究者のアイデアや研究意欲はすばる重要と言われておりますので、新たに採用された新人や若手の職員の育成が大きな課題となります。若い方の研究意欲を尊重しつつ、それぞれの使命を全うできるような指導が重要であると思っております。また、動物衛生研究所では、研究開発部門に加えて、動物管理や衛生検査などの研究支援部門があります。動物衛生研究所における研究はこの研究支援部門を支えとして、研究業務を円滑に進めることができます。それには、研究者同士および研究者と研究支援部門との緊密な意志の疎通と連携協力が不可欠ですし、それぞれの立場で責任を果たしていくことがますます求められてきます。研究所も一つの共同社会ですので、国民への責任と使命を共有して、目標に向かって進む気持ち、さらに、相互理解と良い意味での仲間意識が重要です。

平成18年4月から非特定独立行政法人の研究所となるという変革の時を迎え、第2期に取り組む中期計画などの策定、研究の効率化、重点化に向けて今後行うべき準備作業が増大すると予想されます。良い研究環境を醸成し、その中で、社会から信頼される研究所となることを目指し、職員全員一丸となって取り組むことにより必ず乗り切ることができると思います。今後ともご支援・ご協力を切にお願いする次第です。よろしく申し上げます。